

2025.03.11 すばる科学諮問委員会 議事録

=====

日 時 : 2025.3.11 9:30 – 11:30 JST

場 所 : 各自 zoom 接続

出 席 者 : 諸隈智貴、伊王野大介(遅れて参加)、井上昭雄、河北秀世 (11:00 まで)、
大栗真宗、川端弘治、久保真理子、佐藤文衛、但木謙一、松岡良樹、
和田武彦、植村誠、下西隆

欠 席 者 : 小宮山裕、大朝由美子、富永望

陪 席 者 : 神戸栄治、小山佑世、早野裕、宮崎聡、David Sanders (Director's Report only)

書 記 : 石垣美歩

=====

=== 今回の A/I 及び議論サマリ ===

[報告事項]

宮崎所長から観測所運用について以下の報告があった。

- 望遠鏡のトラブルにより、2月上旬と3月上旬に数夜がキャンセルとなった。
- S25B 期の共同利用公募が締め切られた。PFS-SSP からは 10~20 夜割当のリクエストがあった。
- PFS の最初の観測ランが 3 月 19 日から予定されている。S25A 期は、PFS-SSP チーム PI からのリクエストにより、装置効率の変動を抑えるためのインデックス・マッチングジェルを手動で塗布・洗浄する運用を承認した。
- PFS の最初の観測ラン終了後、観測所内でハードウェア性能の最新状況をまとめ、次回の SAC 会議で報告する。

[議論]

- PFS 生データアクセス権について、SAC や UM でのこれまでの議論を踏まえて、S25B 終了 (2026 年 1 月末日) までの期間のアクセスを承認することとした。
- すばる 3 文書 (booklet) 作成をリードする WG の人選と役割について議論した。
WG メンバーは、主にすばる 2 に関連する研究をしている人を中心に選び、全体の統括をする。文書の内容については SAC、ユーザーと十分な議論の機会を設け、幅広い分野を考慮して検討していくこととした。
- すばる UM の開催時期について、すばるユーザーらを対象としたアンケートの結果を踏ま

え、避けたいという要望が比較的少なく、TAC 報告をタイムリーに実施できる 7 月上旬開催とする方向で合意した。FY2025 については、前回 UM から時間が短いこと、準備期間を十分取る必要があることから、2025 年 10 月～11 月に実施することとした。

- すばる UM での TMT セッション開催について、今年度 UM での反省点を踏まえた上で、今後もすばる SAC と TMT-JSAC が協力して実施していくこととなった。
- 三鷹／zoom 以外の SAC 会議の開催に関して意見が交わされた。若手・大学院生のすばるの活用・UM への参加を促す上で意義がある点で合意した。一方で、開催側の負担が大きいことが懸念されるため、来年度については、地方開催は実施しないこととした。若手や大学院生にすばるに関わってもらうための別の方策については、今後も引き続き検討していく。

=====

1. Report from Subaru Observatory [Miyazaki]

[Summary]

- Several nights have been lost in February due to troubles at the telescope related to the connection of the power supply cable.
- S25B call for proposals has been closed. PFS-SSP team requests 10-20 observing nights in S25B.
- The first PFS observing run will start on March 19th. As requested by the PFS-SSP PI, the observatory approved the manual operation/cleaning of index-matching gel in S25A to minimize the fiber throughput variation.
- The observatory has asked the PFS-SSP team to prepare webpages to report any issues or anomalies in each exposure during the SSP runs.
- The PFS data delivery system for open-use programs is under development. SAC will invite an observatory staff in charge to hear the latest status.
- The observatory will have a meeting on the status of the hardware after the first PFS run in early April. The summary of the discussion will be reported in the next SAC meeting on April 11th (JST).

2. 前回議事録の確認、および承認

[議論のまとめ]

前回の議事録の確認を行い、特にコメントはなく承認された。

3. PFS 生データアクセス権 (諸隈)

[議論のまとめ]

- PFS 生データのアクセス権については、これまでの SAC および UM での議論を踏まえ、S25B 終了（2026 年 1 月末）までの期間に限り、アクセスを承認することとした。

[詳細]

- PFS データ解析パイプライン開発チームによる共同利用データへのアクセスについて、これまでの SAC および UM での議論を踏まえ、田中賢幸さんよりポリシーの改訂案が提出された。要旨は以下の通り。
 - 国際チームで開発している解析パイプラインには開発要素が残っている。
 - さまざまな観測設定、ターゲットに対応できるようにする必要がある。
 - そのために共同利用で取得されたデータへのアクセス権が欲しい。
 - 開発以外の目的では使わないことを遵守する。
 - 現在のところ、アクセスする予定があるのはプリンストン大、ハワイ観測所、東大、ASIAA、LAM、Notre Dame、JHU 等の機関から数名ずつ。
 - 期間はまずは 1 年間（S25A, S25B）としたい。期間を延長したい場合はコミュニティに諮る。

[議論]

（神戸）アクセスの期間は S25B 終了（2026 年 1 月末）までと認識している。

（諸隈）田中さんに承認の旨伝え、アクセス期間について要望通りかどうか確認する。

4. すばる 3 文書

[議論のまとめ]

すばる 3 文書（booklet）作成をリードする WG の人選と役割について議論した。

WG メンバーはすばる 2 に関わる研究を進めている方に入っていただき、全体の統括をする。文書の内容については SAC、ユーザーと十分な議論の機会を設け、幅広い分野を考慮して検討していくこととした。

[詳細]

- WG メンバーは、SAC および観測所から選定することを基本方針とする。
- WG メンバー選定の方針としては、以下の 2 通りが考えられる：
 - ① すばる 2 に関連する研究を進めている研究者を中心に構成する方法
 - ② すばる 2 に特化せず、全分野を網羅的にカバーできるように構成する方法

[議論]

(松岡) WG メンバー選定方針について、2 つの違いは？ ①は、すばる 2 で推している分野だけを文書でカバーするという意味か？

(諸隈) すばる 2 で掲げている内容に関連する研究を進めている人を WG メンバーとし、文書の内容については担当者間で議論するという意味。

(大栗) すばる 3 研究会でアイディアを話してもらった人をお願いをすることで良いか？

(諸隈) 執筆依頼をする人を WG メンバーが議論する。

(大栗) 進め方には 2 つの方法がある。1 つは、SAC と観測所が方向性を決定し、トップダウン的に進める方法。もう 1 つは、ボトムアップ的に広く意見を集めた上で、SAC と観測所がそれを取りまとめる方法である。

(諸隈) すばる 3 研究会での議論を踏まえると、トップダウン・ボトムアップに関する意見はおおよそ半々になっていた。それを含めて WG メンバーが議論する必要がある。①と②の違いは、WG メンバーの人選。たとえば太陽系内天体や星形成はすばる 2 に入っていない。②は人数も多くなる。

(大栗) 方向性を決めるだけなら、全分野入れる必要はないのでは。

(小山) ②の方法の場合の想定としては、TAC 会議でのカテゴリのようにサブ WG を作って、議論する。より大掛かりなロードマップを作る。以前光赤天連で作ったものように、分野ごとに議論して、最後に統合する。最終的にできるものは①と②で同じようになるかもしれないが、スタートの時点でどのくらいコンプリートに分野をカバーするかの違い。

(諸隈) すばる 2 に入っていない分野をどう拾っていくかが課題。WG メンバーの仕事の定義にもよる。

(川端) ①よりは②が良いのでは？すばる 2 に至る過程がよくわからなかった人もいるかもしれない。②で動く方がコミュニティは安心するのでは。すばる 2 をよく知っている方にリードしていただく、というのも一理ある。

(諸隈) 確かに②の方がコミュニティ全体の意見を反映しやすい

(松岡) ②は大変な作業になる。どちらかというと①に賛成。②ではたくさんの分野が並列しただけでどれが重要か分からない結果になることを危惧する。すばる 2 はもしかしたら一部の分野が置き去りにされたように感じられたことがあったかもしれないが、様々な分野の意見を聞きながら①で進めるのが良いのでは。

(大栗) WG の主な役割を議論の枠組みや方針の策定と位置づけるのであれば、当初は少人数のメンバーで始めるのが適切ではないか。どの分野を推すかといった内容まで WG で決定するとすると、川端さんの懸念のとおりになると思われる。

(諸隈) どの分野を推すかなどは SAC で議論することで、広い分野のコミュニティの意見を取り入れることができる。WG は議論の枠組・方針を決めるのがメイン。

(小山) SAC で議論したつもりになっていても、ユーザーが置き去りにされた印象を持たれるかもしれない。ワークショップなどの意見収集の機会を設けるなど、組織だった運用が期待されている。

(諸隈) WG メンバーは全体の統括、誰に何を依頼するかなど。内容についての方針は別途 SAC で議論するとともに、コミュニティからの意見収集の場を設ける。

(小山) 全分野網羅的にやる場合、「2020 年代の天文学」レベルのものにするか。

(諸隈) 現時点ではそこまで目指さないということで良いと思う。

5. すばる UM 日程

[議論のまとめ]

- すばるユーザーを対象としたアンケート結果を踏まえ、「避けたい」という要望が比較的少なかったこと、および TAC 報告をタイムリーに実施できることから、今後は 7 月上旬の開催を目指す方向で合意した。
- 一方で、FY2025 については、前回の UM からの間隔が短く、準備期間を十分に確保する必要があることから、2025 年 10 月～11 月の実施とする。

[詳細]

- Google form で、UM、光赤外天連 ML、すばるユーザーなどを対象にアンケートを実施した。
- 結果
 - 74 人が投票 (faculty staff 55 , post-doc:9, graduate students:10)
 - 12 月後半-3 月前半は避けてほしいという要望が高い。

- ベスト は 6 月後半だが、授業期間中。
- 5 月後半、6 月、7 月前半、10 月後半、11 月、12 月前半も悪くない。

[議論]

(松岡) faculty は授業期間希望が多い。休講にする前提なのでは。

(井上) 前期はお盆の頃まで、後期は 2 月初めまでは授業がある場合が多いのでは。休講にするならば問題ない。国立天文台の教授らは授業を考慮する必要がないため、要望が薄まっている可能性がある。また、6 月にすると、B 期の TAC 報告に最新の結果が反映されない（レビュー結果は出ているが、公表前）

(植村) その点で言うと 7 月はちょうど良い。

(諸隈) (本来はその意図で集めた情報ではないが)メールアドレスをざっと見ただけだが、国立天文台所属の回答者数は多くはない。大学の faculty の割合が高かった。

(諸隈) TAC 報告のタイムリーさを重視するのであれば、6 月後半～7 月。それを重視しない場合は、6 月、7 月、10 月といった選択肢も考えられる。

(久保) 海外からの参加者を招く場合、7 月は渡航が難しい時期かもしれない。そのため、参加を避けたいピーク時期さえ外せば、開催時期は特定の月にこだわらず柔軟に考えてもよいのではないか。

(諸隈) 日本の参加者にできるだけ多く出席してもらうことに高い優先度を置くのが望ましい。また、ユーザーの関心が高いと考えられる TAC 報告を重視するのであれば、開催時期としては 7 月上旬が適しているのではないか。

(井上) 今年 7 月に開催する場合は、現時点から準備を開始する必要がある。FY2025 については 10 月頃の開催とし、FY2026 以降については 7 月開催を目指してはどうか。

(大栗) 7 月の方が良い理由は？

(諸隈) タイムリーな TAC 報告ができること。

(大栗) 海外では夏季休暇に入るため、同時期に多くの研究会が開催される。

(諸隈) FY2025 については、現在より約 3 か月前倒して、10 月～11 月の開催とする。その後はさらに 3 か月前倒しし、7 月上旬での開催を検討する。詳細は後ほど具体化する予定。世話人は後日決定する。当面は、大規模な研究会の開催状況について情報を集め、国立天文台のスタッフに大セミナー室の空き状況を確認してもらう。次回または次々回の SAC 会議で、日程を正式に決定する。

(宮崎) すでに判明している大規模な研究会としては、以下のものがある：

- EAMA11 (11th East Asia Meeting on Astronomy) :
12 月 8 日～12 日、新潟にて開催予定
- 検出器ワークショップ (Detector Workshop) :

10月6日～10日、オーストラリアにて開催予定

6. TMT-SAC（伊王野）

[議論のまとめ]

- すばる UM での TMT セッション開催について、今年度 UM での反省点を踏まえ、今後もすばる SAC と TMT-JSAC が協力して開催していくこととなった。

[詳細]

- 3月5日に TMT-JSAC 会議が開催された。すばる UM での TMT セッションについて反省会が行われた
- 今後も継続的に開催するか？
 - 今後も継続するのが良い。
 - アンケート（10名回答）でも、すばる UM に合わせて開催するのが良いという意見が多かった。
 - 来年度以降も Subaru/TMT 両 SAC で協力して実施していく。
- どうすれば議論が盛り上がる？
 - 事前の情報共有
 - 論点の明確化
 - 議論は日本語で
 - セッションの分割（UM の時間とは別枠で、TMT 議論の時間を設ける）
 - 若手が発言しやすいように、テキストベースで発言できるディスカッションツールの活用

[議論]

（諸隈）今の時点で想定される、TMT-JSAC と SAC との議論のポイントは具体的に何かあるか？

（伊王野）具体的には出ていない。

7. その他

[議論のまとめ]

三鷹／Zoom 以外での SAC 会議開催について意見が交わされ、若手研究者や大学院生によるすばるの活用や UM への参加を促進するうえで意義があるという点で合意が得られた。一方で、

開催側の負担も小さくないことから、少なくとも来年度は地方開催を実施しないこととした。
若手や大学院生にすばるに関わってもらうための別の方策については、今後も引き続き検討していく。

[詳細]

- 三鷹/zoom 以外（地方大学など）でのすばる SAC 開催
 - 以前は国立天文台・三鷹キャンパス以外の大学での開催で、SAC 会議後に若手・院生とすばるについての情報・意見交換を目的とした懇談の機会を設けていた。
 - これまでは京都、愛媛、東北などでやっている。天文関係の大学院生・若手がそれなりに多くいる大学

[議論]

(但木) 過去の実績をよく知らないが、1つの大学に SAC 委員が集まるのはコスパが悪すぎるのでは？

(久保) UM 自体にも院生が減っているので、院生がすばるに関わっていくための方策をとる必要がある。

(諸隈) 院生の UM 参加が減っている理由として、院生のすばる利用そのものが減っているのか、あるいはすばるを使っているが UM には来ないのか、どちらなのだろうか。

(松岡) アーカイブデータを使っている人はたくさんいる。PI で時間をとっている人は少ないかもしれない。SSP の影響もある。

(久保) 東北の学生はすばるに積極的にプロポーザルを出し、アーカイブも使っている。今年はたまたま修論・D 論と重なって参加者が少なかった。去年は参加が多かった。

(松岡) SAC 会議の後に若手研究者と交流することには意義がある。学生にとっても、UM への参加意欲を高めるきっかけとなるだろう。一方で、地方開催の場合は、主催側の負担が大きくなるという課題もある。

(諸隈) 若手研究者の参加を促すことが目的であるため、その意識を持って別の手段を検討するのが望ましい。少なくとも来年度については、SAC 会議の地方開催は実施しないこととする。

- ToO について WG で議論を再開する。
- 光赤天連総会@天文学会：3月19日昼休み（11:50-12:50）
報告：下西さん、資料作成：諸隈
- 次回は4月11日9時30分(JST)から。